

<結果の概要>

1 出生

(1) 出生数は、10,213で前年より211人減少し、過去最低となった。出生率（人口千対）も過去最低の8.4であった。

出生数は昭和49年以降減少傾向にあり、平成11年以降は1万1千人を割りこんで推移している。

(2) 出生数を母の年齢（5歳階級）別にみると、前年に比べ、20歳代前半で128人の減少となっているほか、20歳代後半、30歳代前半でも減少している。

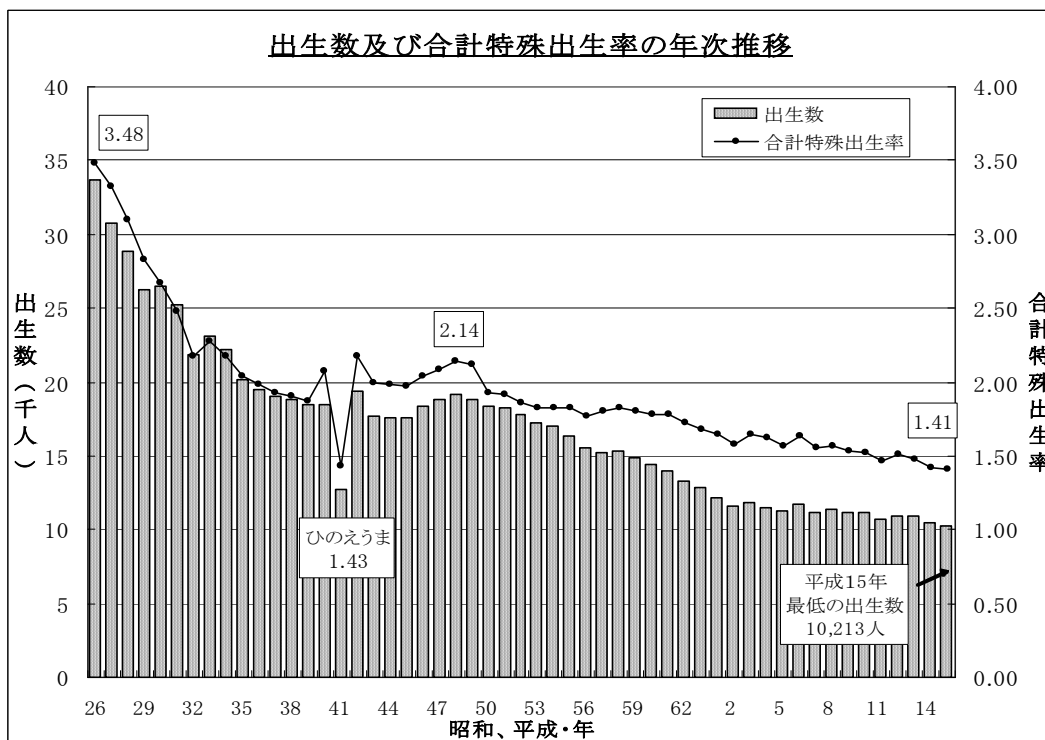
年齢階級(歳)	出生数(人)	
	15年	14年
15～19	165	177
20～24	1,474	1,602
25～29	3,847	3,920
30～34	3,369	3,478
35～39	1,204	1,109
40～44	150	138
45～49	3	0
その他	1	0
計	10,213	10,424

2 合計特殊出生率

合計特殊出生率は、1.41で前年の1.42を下回り、過去最低となった。

その年次推移をみると、昭和50年以降低下傾向にある。

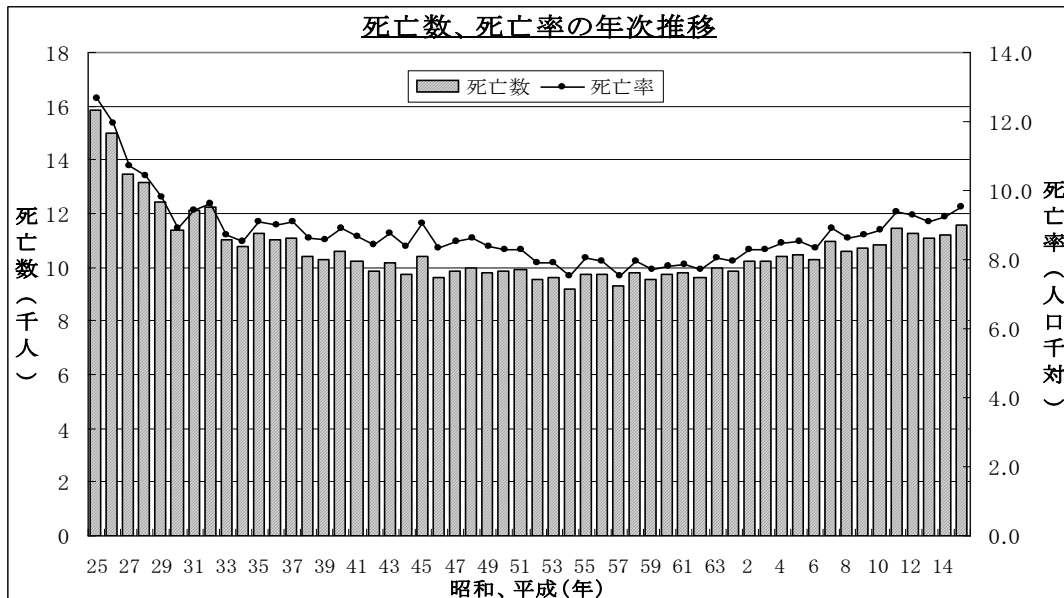
なお、全国の合計特殊出生率も過去最低の1.29となった。



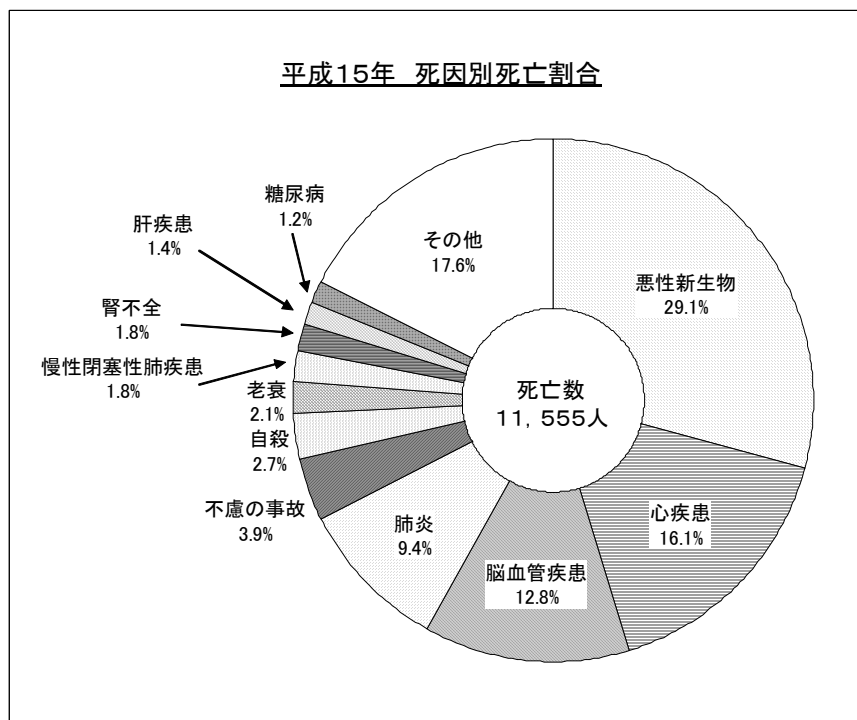
3 死 亡

(1) 死亡数は、11,555人で前年より344人増加した。

死亡率（人口千対）は、9.5で前年を上回り、その年次推移を見ると、昭和50年代後半以降、上昇傾向にある。



(2) 死因順位についてみると、第1位は悪性新生物（29.1%）、第2位は心疾患（16.1%）、第3位は脳血管疾患（12.8%）で、この三大死因が死亡数の約6割（58.0%）を占めている。



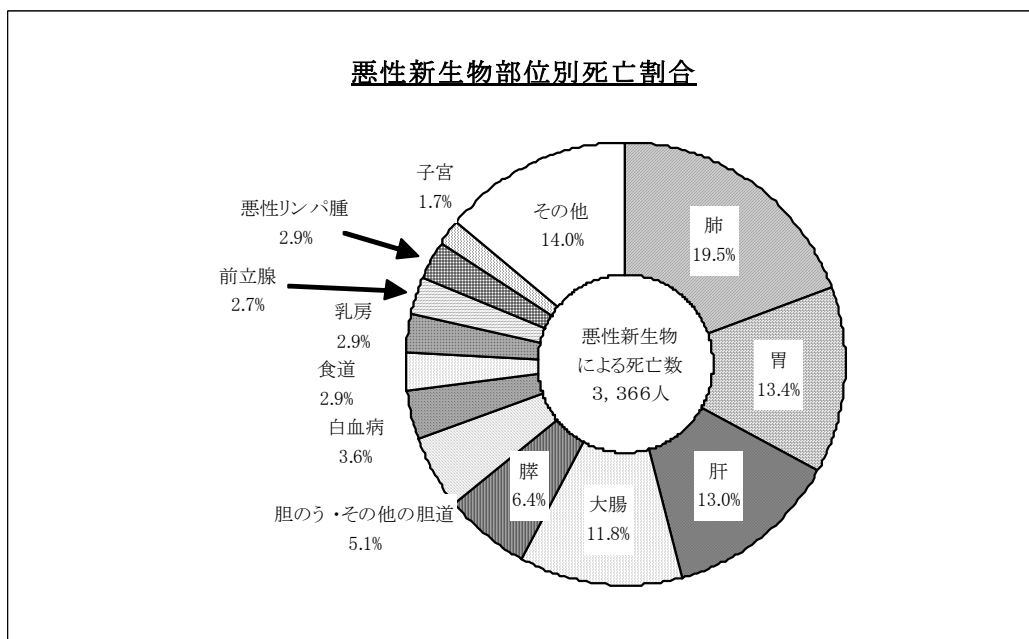
また、死因別死亡数を前年と比較すると、減少したのは、脳血管疾患（32人減）、老衰（13人減）、自殺（7人減）などであり、増加したのは、悪性新生物（118人増）、不慮の事故（81人増）などである。

主な死因別死亡数・死亡率

死 因	平成15年				平成14年			対前年比	
	順位	死亡数	死亡率	割合	順位	死亡数	死亡率	死亡数	死亡率
全 死 因		11,555	954.2	100.0		11,211	923.5	344	30.7
悪性新生物	1	3,366	278.0	29.1	1	3,248	267.5	118	10.4
心 疾 患	2	1,865	154.0	16.1	2	1,838	151.4	27	2.6
脳血管疾患	3	1,475	121.8	12.8	3	1,507	124.1	△ 32	△ 2.3
肺 炎	4	1,086	89.7	9.4	4	1,051	86.6	35	3.1
不慮の事故	5	453	37.4	3.9	5	372	30.6	81	6.8
自 殺	6	309	25.5	2.7	6	316	26.0	△ 7	△ 0.5
老 衰	7	241	19.9	2.1	7	254	20.9	△ 13	△ 1.0
慢性閉塞性肺疾患	8	212	17.5	1.8	9	183	15.1	29	2.4
腎 不 全	9	211	17.4	1.8	8	202	16.6	9	0.8
肝 疾 患	10	162	13.4	1.4	10	152	12.5	10	0.9
糖 尿 病	11	140	11.6	1.2	11	137	11.3	3	0.3

死亡率：人口10万人対。

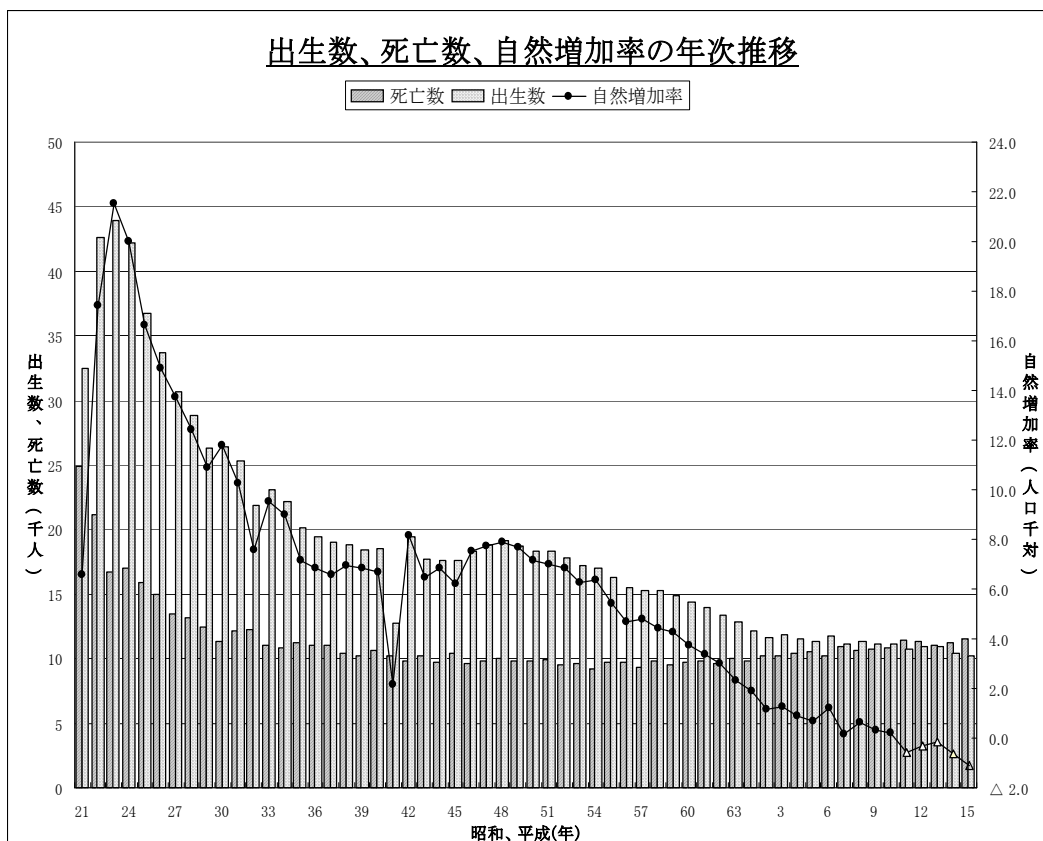
なお、悪性新生物の部位別の死亡順位をみると、肺がん（19.5%）を筆頭に、胃がん（13.4%）、肝がん（13.0%）、大腸がん（11.8%）と続き、この4つで悪性新生物全体の約6割（57.7%）を占めている。



4 自然増加

出生数から死亡数を差し引いた自然増加数は、マイナス1,342人で、平成11年以降、死亡数が出生数を上回る自然減の状態となっている。

自然増加率（人口千対）は、マイナス1.1で前年のマイナス0.6より減少幅が拡大した。



5 乳児死亡

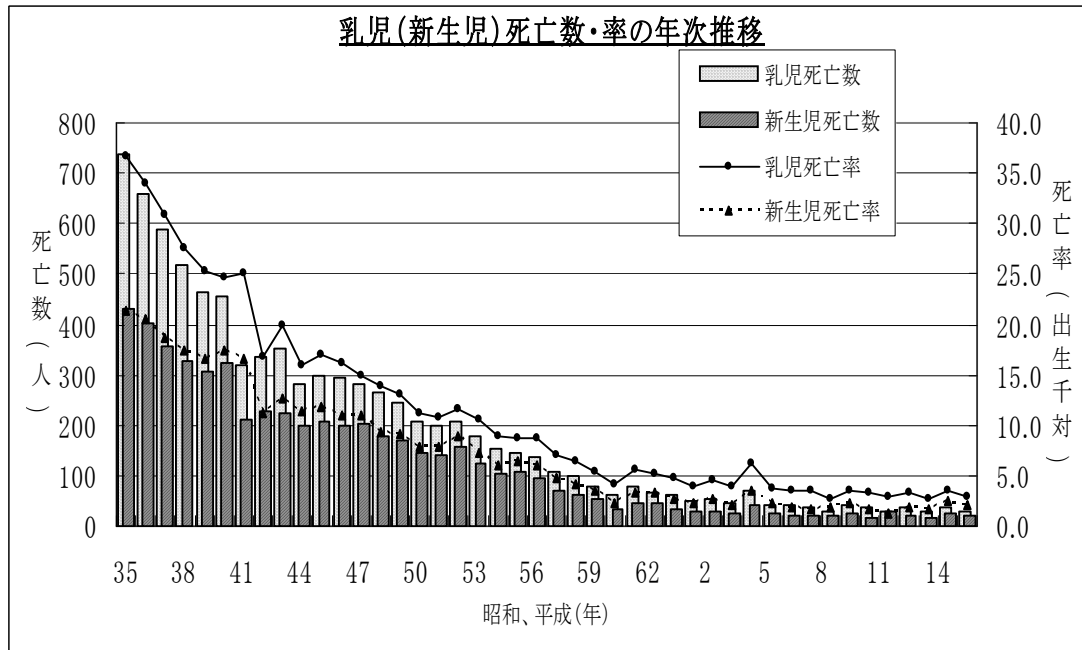
生後1年未満の死亡である乳児死亡数は、31人で前年より6人減少した。

乳児死亡率（出生千対）は、3.0で前年の3.5を下回った。その年次推移をみると、昭和60年までは急激に低下し、その後は、上昇と下降を繰り返しながら、平成5年以降ほぼ横ばいに推移している。

6 新生児死亡

生後4週未満の死亡である新生児死亡数は、21人で前年より5人減少した。

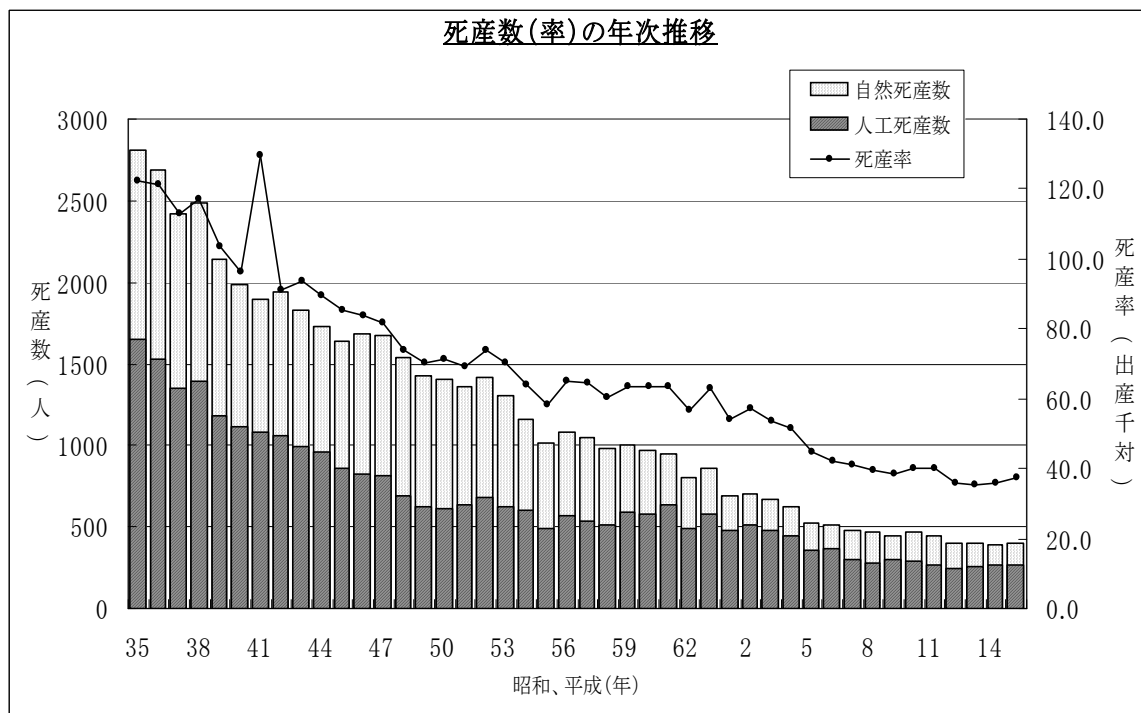
新生児死亡率（出生千対）は、2.1で前年の2.5を下回った。その年次推移をみると、乳児死亡と同様の傾向で推移している。



7 死産

死産数は、397胎で前年より9胎増加し、その内訳は、自然死産数が134胎、人工死産数が263胎となっている。

死産率（出産千対）は、37.4で前年の35.9を上回ったが、その年次推移を見ると、ここ数年は横ばいとなっている。



8 周産期死亡

妊娠満22週以後の死産に、生後1週未満の早期新生児死亡を加えた周産期死亡数は、55（胎・人）で前年より7（胎・人）減少した。

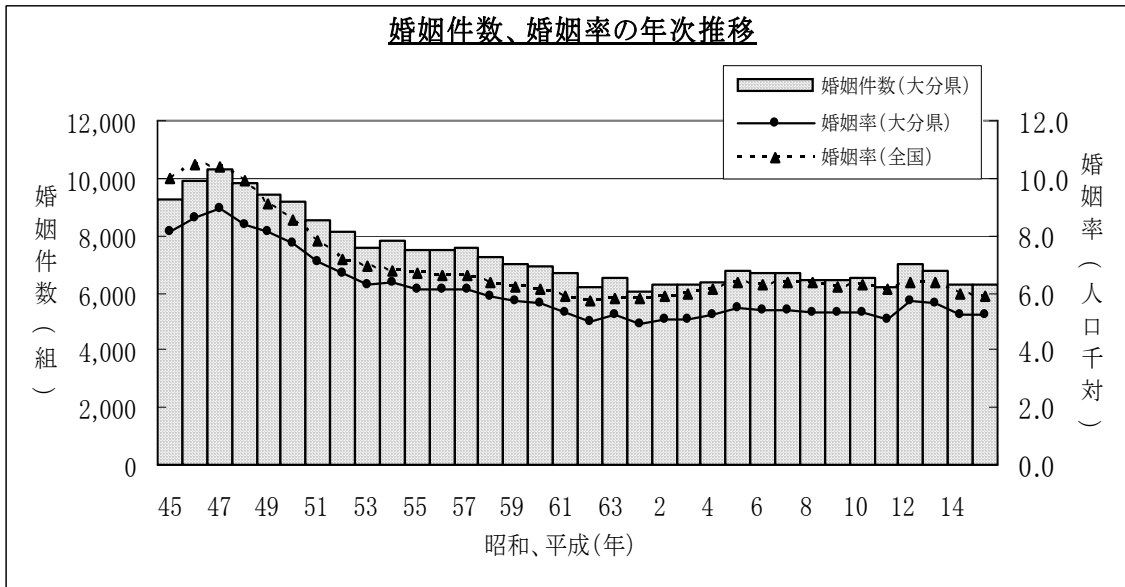
その内訳は、妊娠満22週以後の死産が42胎、早期新生児死亡が13人となっている。

周産期死亡率（出産千対）は、5.4で前年の5.9を下回った。

9 婚 姻

婚姻件数は、6, 257組で前年より49組減少した。

婚姻率（人口千対）は5. 2で前年と同じで、その年次推移をみると、昭和48年以降低下を続けた後、平成に入ってほぼ横ばいに推移している。



なお、平均初婚年齢は、夫28.8歳、妻27.4歳であった。

夫については、平成に入ってほぼ横ばいであったが、平成13年以降上昇傾向にある。妻については緩やかであるが、ほぼ毎年上昇が続いている。

平均初婚年齢の年次推移

	夫		妻	
	大分県	全 国	大分県	全 国
平成3	28.2	28.4	26.0	25.9
4	28.2	28.4	26.0	26.0
5	28.2	28.4	26.1	26.1
6	28.2	28.5	26.1	26.2
7	28.2	28.5	26.2	26.3
8	28.2	28.5	26.3	26.4
9	28.1	28.5	26.3	26.6
10	28.1	28.6	26.5	26.7
11	28.0	28.7	26.6	26.8
12	28.1	28.8	26.7	27.0
13	28.4	29.0	26.9	27.2
14	28.4	29.1	27.1	27.4
15	28.8	29.4	27.4	27.6

10 離 婚

離婚件数は、2,731組で前年より49組増加し、過去最高となった。

離婚率（人口千対）は、2.26で前年の2.21を上回り、過去最高を更新した。その年次推移は平成3年以降、上昇傾向にある。

